

中国人日本語学習者の日中同形同義語の品詞性の習得 —語彙知識・文法知識との因果関係—

熊 可欣 (名古屋大学大学院)
玉岡 賀津雄 (名古屋大学)
早川 杏子 (関西学院大学)

要旨

中国人日本語学習者の日中同形同義語¹ (以下, 同形語) の品詞の習得状況と, 学習者の語彙および文法知識それぞれの品詞習得への影響を検討するために, 中国の大学の日本語専攻生 165 名に対して調査を行った。同形語を日中両言語で, 品詞情報が同じ語「日＝中」, 中国語の方が日本語より品詞の使用範囲が広い語「日＜中」, 日本語の使用範囲が広い語「日＞中」, 両言語で一部の品詞を共有するが, それぞれ独自の品詞も持つ語「日∪中」, 両言語で品詞が全く異なる語「日≠中」に分けて, 四者択一式のテストを作成し, 語彙および文法テストと共に行った。調査の結果, 「日＝中」と「日＜中」は得点が高く, 残りの3つは, 「日＞中」, 「日∪中」, 「日≠中」の順で低くなった。また, 「日＝中」「日＜中」「日∪中」の文レベルでの習得に, いずれも各タイプに関連した日本語の品詞の知識および形態素変化と局所依存の文法知識が貢献していることが分かった。

キーワード: 日中同形同義語, 品詞性の習得, 語彙・文法知識, テスト, 学習法

1. はじめに

日本語と中国語には, 字形が類似し, 基本義が一致する漢字語 (以下, 同形同義語) が多く存在する。文化庁 (1978) によれば, 10 冊の日本語教科書から抽出した約 2000 語の漢語のうち, 同形同義語が3分の2を占める。また, 陳 (2002a) は語種にこだわらず, 漢字2字で構成される 4,353 語を意味で分類したところ, 同形同義語が最も多く, 55.1%を占めた。これらの語彙は, 日中両言語で書字と意味の類似度が大きく, 中国人日本語学習者にとって習得しやすい語彙であると言われている。しかしながら, これらの語彙が, 文のレベルで使われた場合には, 「もちろんもっとも流行なことだ。」 (張, 2009) の誤用例のように, 文法的なズレによる誤りがしばしば見られる (陳, 2002b; 張, 2009 など)。さらにまた, 同形同義語の品詞性に関する先行研究 (陳, 2002b; 張, 2008 など) を見ると, 日中対照研究や習得の研究が行われてきたものの, 第2言

語（L2）である日本語での語彙使用頻度や学習者の日本語能力が統制されていないため、中国人日本語学習者の習得状況が明らかにされているとは言い難い。そこで、本研究は、日本語学習者の語彙知識および文法知識を測定するテストを行った。さらに、日中両言語間の品詞の対応条件間で語彙使用頻度を統制した。その上で、次の2つの手続きで調査を実施した。第1に、同形同義語の品詞の両言語間の対応関係によって、中国人日本語学習者のこれらの語彙の品詞性の習得が異なるかどうかを検討した。第2に、中国人日本語学習者の語彙知識および文法知識が同形同義語の品詞性の習得にどのように貢献しているかを分析した。

2. 先行研究の概観と本研究の課題

これまで、日中同形語の意味と用法の観点での対照研究や習得研究が行われてきた。とりわけ、同形同義語については、運用場面において、日中両言語の品詞のズレによる誤用が多く見られる。そのため、日中両言語における品詞性の違いに焦点を当てた研究（石・王, 1983; 陳, 2002b; 張, 2008, 2009）と集合論の枠組みを用いて分類した研究（王, 2013, 2014; 熊・玉岡, 2014 など）の2つが行われてきた。

2.1 同形同義語の品詞パターンによって分類した研究

同形同義語の品詞に関する従来の研究をみると、その多くは日本語と中国語における品詞パターンの相違を対照しながら、いくつかのタイプに分けて検討したものである。しかしながら、品詞分類は統一されていない。それぞれの研究で用いられた分類の型をまとめ、表1に示した。

石・王（1983）は同形同義語を分類する前に、アンケート調査を用いて品詞使用に見られる母語（L1）からの干渉を検討した。調査では、4年から7年の学習歴を持つ中国人日本語学習者20人に50語の同形語の品詞を書かせた。その結果、母語の中国語が強く干渉していることが示された。そこで、日中両言語における品詞の相違を区別し、誤りを避けるために、中国語の小説およびその訳本から品詞の異なる107語の日中同形語を抽出し、品詞の対応関係に基づいて7タイプに分類した。

また、陳（2002b）は言語類型の違いによって、同形同義語を6タイプに分類している。これを、学習歴の異なる2グループの台湾出身の日本語学習者に、6タイプの同形同義語が含まれた日本語の文の自然さについて5段階で判断してもらった。その結果、学習歴が長くなるにつれ習得が進むものの、母語である中国語に従って日本語の自然さを判断する傾向があると報告している。さらに、表1に示した陳（2002b）の6タイプの習得難易度にも違いがみられ、難しい順に「タイプ2>タイプ3=タイプ4>タイプ1>タイプ6>タイプ5」となったと記している。

表 1 石・王 (1983), 陳 (2002b), 張 (2008, 2009) の品詞分類

研究	石・王(1983)		陳(2002b)		張(2008, 2009)	
語数	107語		—		—	
タイプ	中国語	日本語	中国語	日本語	中国語	日本語
1	形容詞	自動詞	自他動詞	自動詞/名詞	動詞・形容詞	形容詞
2	副詞	動詞	形容詞	自動詞/形容詞	名詞・動詞	名詞
3	形容詞・他動詞	形容詞	他動詞	自動詞(二格)	名詞・動詞・形容詞	名詞・動詞
4	他動詞/自他動詞	自動詞	副詞	動詞	名詞・形容詞	名詞
5	他動詞	自動詞(二格)	名詞	動詞	名詞	名詞・動詞
6	動詞	名詞	動詞	ニ(へ)~する 場所+ヲ~する	名詞	名詞・副詞
7	自他動詞 動詞 名詞	自動詞 移動/経過 動詞			副詞	動詞
8					副詞	形容詞
9					副詞	名詞

さらに、張 (2008, 2009) は旧日本語能力試験出題基準 (以下、『旧試験』) に掲載された同形同義語を抽出して、「名詞、動詞、形容詞、副詞」の 4 種類の品詞性を日中両言語の対応関係に基づいて 9 タイプに分類した。その中から、張 (2008) では、表 2 の(1)~(6)の 6 タイプを取り出して調査した。

表 2 張 (2008) の品詞タイプおよび調査結果

タイプ	中国語	日本語	正答数 ²	誤答数
1	動 詞	名 詞	30	42
2	形容詞	動 詞	48	24
3	形容詞	名 詞	29	43
4	名 詞	動 詞	67	5
5	副 詞	形容詞	49	23
6	副 詞	名 詞	49	23

張 (2008) は、各タイプにつき 3 語、合計 18 語の同形語を用いて、24 名の上級または超上級の日本語学習者に文法性判断テストを実施した。これらすべての調査項目は『旧試験』の 4 級から 1 級までの語彙から抽出したものである。調査の結果、日本語が名詞で、中国語が動詞または形容詞の場合は、正答率が低く、負の転移が 6 つのタイプで最も顕著に見られた。一方、これとは対照的に、日本語が動詞で、中国語が名詞の場合には、6 つのタイプで正答率が最も高く、中国語からの負の転移が弱かつ

たことが報告されている。

2.2 集合論に基づくタイプ分け

日中同形語は多数あり，特に中国語の品詞性が複雑である。そのため，すべての語を一对一に品詞対応でまとめるのは難しい（王, 2013）。これに対応するために，集合論の枠組みを取り込んで分類した研究が見られる（王, 2013, 2014; 熊・玉岡, 2014）。王（2014）は日中両言語における意味と品詞の対応を考慮して，同形語を 25 タイプに分けた。さらに，「①意味のみの誤用」「②品詞のみの誤用」「③意味と品詞における二重誤用」「④共起の誤用」の発生メカニズムを検討した。特に本研究が注目する「②品詞のみの誤用」については，日本語の品詞使用範囲がより大きい場合は，誤用が生じる可能性がないのに対し，中国語の品詞使用範囲がより大きい場合は，誤用が生じやすいと述べている。しかし，王（2014）ではどのような資料を分析に使用して日中同形語を 25 タイプに分けたのか，また，各タイプの用例についても触れられておらず，分析に使った資料の出典や用例が明記されていない。

表 3 熊・玉岡（2014）による 1,383 語の品詞分類

タイプ	説明	例	日本語	中国語
日＝中	日中両言語で品詞が完全に同じである語	練習	名・動	名・動
日<中	日中両言語で同じ品詞もあるが，中国語に独自の品詞もある語	科学	名	名・形
日>中	日中両言語で同じ品詞もあるが，日本語に独自の品詞もある語	電話	名・動	名
日∪中	日中両言語で共有する品詞もあるが，それぞれ独自の品詞ももつ語	成功	名・動	動・形
日≠中	日中両言語で品詞が完全に異なる語	混乱	名・動	形

これに対し，熊・玉岡（2014）は集合論の観点から，日中同形の 1,383 語を品詞性の対応関係に基づいて「日＝中」「日<中」「日>中」「日∪中」「日≠中」の 5 つのタイプに分けて集計した。各タイプの概要は表 3 に示した通りである。すべての語は朴・熊・玉岡（2014）のデータベースから抽出したもので、『旧試験』の 4 級から 2 級までの語彙である。日本語の品詞は 5 冊の国語辞書，中国語の品詞情報は 2 冊の辞書に掲載された情報に準じている。複数の辞書記述に従っていることから，主観的な品詞判定に比べれば，品詞判断の信頼性は高いと言えよう。熊・玉岡（2014）ではさらに，集計結果に基づいて各タイプの習得難易度を予測し，学習法の提案を行っている。

2.3 問題の所在と本研究の課題

品詞パターンのズレに関する研究では、日中対照ばかりでなく、中国人日本語学習者の習得も対象にしている。石・王（1983）および陳（2002b）は、日中両言語における品詞的なズレをめぐって、学習者の習得状況を調査紙によって検討し、同形同義語の品詞使用が母語の中国語に強く干渉されていることを示唆した。日本語能力が上級レベルに達しても品詞的なズレを完全に習得できていないものの、学習年数あるいは滞日年数が増えるにつれ習得が進むことから（陳, 2002b）、学習者の日本語能力が同形同義語の品詞習得に貢献していることがうかがえる。しかしながら、以上の2つの研究の調査項目をみると、「衰弱」「激怒」「撤退」のように『旧試験』に入っていない語が多く存在しており、学習者にとって未習の語である可能性が高いことから、中国語を母語とする日本語学習者は、こうした未習の語を判断する際に、中国語の知識に基づくほかなかったとも考えられる。したがって、こうした可能性を排除するには、目標言語の語彙使用頻度および難易度を統制し、日常生活でよく使われる語彙を調査項目とする必要がある。

これに対して、張（2008）は文レベルで『旧試験』に掲載された同形同義語のみを使用し、文法性判断テストを用いて考察した点で評価できる。しかし、次の3つの問題点が挙げられる。第1に、品詞判断の基準が明記されていない。そのため、品詞判断に対する信頼性が十分に保証されていない。第2に、タイプ分けを行う際に、日中両言語で品詞がズレているかどうかのみに注目しているため、複数の品詞を持つ場合には、この張（2008）の分類では、明確にタイプ分けができない。たとえば、「実用」は日本語が名詞で、中国語が動詞と形容詞であり、表2のタイプ(1)とタイプ(3)のいずれにも該当する。両分類に属してしまうので、日中両言語の品詞のズレを検討するには不十分である。第3に、調査項目が少なく、加えて上級学習者だけに限定して調査を実施している。そのため、日本語能力の異なる学習者を比較することができず、同形同義語の品詞性の習得の流れを概観できない。

一方、熊・玉岡（2014）は網羅的かつ信頼性の高い品詞分類を提示した点で評価されるが、熊・玉岡（2014）も論文内で指摘しているように、品詞的なズレがあることが必ずしも誤用を引き起こす原因になるとは限らない。この点については、分類ごとの習得難易度についてテストや実験で実証しなければならない。本研究では、以上の先行研究の知見および残された課題を踏まえ、熊・玉岡（2014）の品詞分類に従って調査用のテストを作成し、日本語能力の異なる中国人日本語学習者を対象に調査を行う。第1に、同形同義語を文レベルで使用する場合、「日＝中」「日<中」「日>中」「日∪中」「日≠中」の5つの日中両言語の品詞分類のタイプによって習得難易度がどのように異なるかを比較する。第2に、学習者の語彙知識と文法知識が、これら5つのタイプの品詞分類の習得にどのように影響するかについて検討する。

3. 研究方法

3.1 調査対象者

中国の東北地方にある大学で日本語を専攻する2年生46名と3年生119名、合計165名を対象に調査を実施した。調査対象者は18歳4ヶ月から23歳1ヶ月までの範囲で、平均年齢が20歳6ヶ月（標準偏差は8ヶ月）であった。日本語学習歴は最短1年2ヶ月で、最長2年2ヶ月、平均1年10ヶ月（標準偏差5ヶ月）であった。全員日本に留学した経験はなかった。

3.2 日本語の語彙知識と文法知識の測定

調査対象者の語彙知識を測定するために、宮岡・玉岡・酒井（2011）の語彙テストを使用した。このテストは、例1に示したように、短文の空所に最も適切な語を入れる形の四者択一の問題である。名詞、動詞、形容詞の3つの品詞カテゴリーが設けられ、各品詞につき12語が選定されており、語種（和語、漢語、外来語）および『旧試験』の配当級が統制されている。特に、漢語を選定するにあたり、中国語に存在しないもののみ使用されている。さらに12語の機能語³も含めて、合計48問のテストになる。この語彙テストの信頼性を確認するために、宮岡他（2011）がクロンバックのアルファ係数（Cronbach's α ）の指標を用いて、信頼性評価を行ったところ、中国人日本語学習者281名で、 $\alpha=.74$ であった。本研究の165名の学習者に対する調査では信頼性係数は $\alpha=.85$ で、十分な信頼性を持つと言えよう。

例1. 最近、仕事が忙しくて、（ ）毎日を過ごしている。

あわただしい そそっかしい たのもしい あつかましい

また、文法知識を測定するテストとして、早川・玉岡（2015）によって開発されたテストを使用した。この文法テストは、形態素変化、局所依存と構造の複雑性の3つのカテゴリーから成る。各カテゴリーにつき12問、合計36問で、語彙テストと同様に、四者択一式の問題である。たとえば、「着て」「着って」「着いて」「着んで」から、1つ正しい選択肢を選ばせるような、単語内の形態的变化に関する質問項目は「形態素変化」に属する。また、局所依存とは、隣接する2つの単語が正しく共起しているかを問う問題である。たとえば、形容詞「大きい」を動詞「広げる」と結びつける場合に、「大きく」「大きいな」「大きい」「大きくて」のどれが正しいかを判断させる問題である。最後に、構造の複雑性は例2に示したように、1つの文の中で離れたところに位置する単語同士の共起関係についての理解を測定するものである。早川・玉岡

(2015) は、143 名の中国人日本語学習者のデータを基にこのテストの信頼性係数を算出して、 $\alpha=.82$ という高い信頼性を得ている。本研究では、165 名のデータで分析したところ、信頼性係数が $\alpha=.75$ で、早川・玉岡 (2015) の信頼性を下回ったが、ある程度の信頼性を示した。

例 2. 私は昨日、() 宿題を手伝ってもらった。

兄が 兄に 兄を 兄から

3.3 品詞性テストの作成

3.3.1 調査対象語の選定

本研究は熊・玉岡 (2014) の分類に従い、同形同義語を「日＝中」「日<中」「日>中」「日U中」「日≠中」の 5 つのタイプに分けた。表 4 でまとめたように、各タイプにつき 8 語、合計 40 語の同形同義語を調査の対象とした (以下、調査対象語)。すべての語は、朴・熊・玉岡 (2014) が作成した日韓中データベース⁴ から抽出したものである。意味の判定については、文化庁 (1978) と『中日漢語対比辞典』(張, 1987) のいずれか一方の分類で S 語 (Same) と判定された語を同形同義語と認定した。

表 4 本研究の調査対象語

日＝中	練習, 運動, 構成, 証明, 存在, 自由, 意外, 不幸
日<中	科学, 系統, 現実, 伝統, 理想, 民主, 友好, 衛生
日>中	電話, 貿易, 学問, 結論, 広告, 提案, 故障, 勝負
日U中	成功, 尊敬, 統一, 努力, 平均, 失望, 豊富, 明確
日≠中	一般, 合理, 参考, 実用, 専制, 優勝, 混乱, 徹底

5 つのタイプの調査対象語を等質にするために、朴・熊・玉岡 (2014) のデータベースに記録されている情報を用いて語の使用頻度と、『旧試験』(2007, 改訂版) の配当級を統制した。語の使用頻度については 2 つの新聞に基づく。1 つは、1985 年から 1998 年までの 14 年分の朝日新聞から抽出した語彙の使用頻度である (天野・近藤, 2000)。もう 1 つは、形態素解析エンジン MeCab 0.991 (IPA 辞書を使用) を用いて語彙を判定し、2000 年から 2010 年までの 11 年分の毎日新聞のコーパスで算出した頻度である (Tamaoka, Makioka, Sanders, and Verdonschot, 2017)。以上に述べた 2 種類の新聞コーパスにおける使用頻度および『旧試験』における配当級を、一元配置の分散分析を用いて検定した。その結果は、表 5 の通りである。

5 つのタイプにおける語は、朝日新聞コーパスでの頻度 [$F(4,35)=1.02, ns$], 毎日新聞コーパスでの頻度 [$F(4,35)=0.36, ns$] および配当級 [$F(4,35)=2.07, ns$] に有意差が見られな

かった。したがって、これらの5つの品詞タイプの間における語彙的特性には違いがないと考えられる。

表5 各タイプの調査対象語の語彙特性比較

語彙特性	日＝中		日<中		日>中		日U中		日≠中	
	M	SD								
使用頻度										
朝日新聞	9.65	1.02	9.27	1.20	9.68	1.08	9.32	1.02	9.06	1.78
毎日新聞	9.34	1.21	9.01	0.72	9.68	1.10	9.20	1.26	8.16	2.42
配当級	2.50	0.76	2.13	0.35	2.50	0.76	2.00	0.00	2.00	0.00

注：Mは平均，SDは標準偏差(以下同様)。使用頻度は自然対数に変換した値である。

3.3.2 調査文の作成

本研究では、中国人日本語学習者による同形同義語の文レベルでの使用を調べるために、品詞を示す形態素に関する四者択一のテストを作成した。テストは、修飾語である対象語の正しい品詞を選択肢から選ぶものである。文構造など品詞以外の影響要因を排除するために、調査文はすべて連体修飾節で構成され、対象語は被修飾語直近の位置に配置した。たとえば、「豊富」は日本語では名詞と形容詞として使用されるが、中国語では動詞と形容詞の2種類の品詞を持つ。形容詞としての使用は共通であるが、それ以外は日中両言語で異なる品詞である。そのため、「日U中」に分類される。日本語では、例3のように、「豊富」には動詞としての機能はなく「～する」を直接付加することはできないので「豊富にする」が正解であるが、中国人日本語学習者であれば母語の影響で「～する」を直接つけて「豊富する」を選ぶ可能性がある。

例3. 子供の経験を（ ）イベントがたくさん行われている。

- 豊富にする 豊富する 豊富な 豊富的な

一方、「努力」は日本語では名詞と動詞として使用されるが、中国語では動詞と形容詞である。動詞として使用する場合、連体修飾節では、例4のように、「努力する」が正解である。しかし、中国語では形容詞としても使うので、中国人日本語学習者は「努力な」を選好する傾向があると推測される。

例4. 夢をかなえることができるのは（ ）人だ。

- 努力にする 努力する 努力な 努力的な

日中両言語で形容詞性の有無に差異がある場合、中国人日本語学習者は「～な」と「～的な」の区別が難しい。日本語の「～的」は前接語に対して形容詞性を付与する機能を持っている。それに対し、中国語の「的(de)」は前部要素の品詞を変える機能はない(王, 2012; 岸, 1969 など)。たとえば、「科学」という語は、日本語では名詞のみで使用されるが、中国語では名詞と形容詞の2つの品詞を持ち、「日<中」に分類される。例5のように、日本語の「科学」には形容詞の機能がないことから、形容詞として使用するためには「～的」を付加して「科学的な」とする必要がある。しかし、中国人日本語学習者は、母語の影響から、日本語の「科学」が形容詞性を持つと思い込み、「～な」であるか「～的な」であるかの判断に迷うであろうと推測される。

例5. 講演で説明があったように、これは非常に()療法だといえる。

科学にする 科学する 科学的な 科学的な

品詞性テストでは、選択肢を「～にする/にした」「～する/した」「～な」「～的な」の4つに絞った。表4に示した5つのタイプにつき8語の調査対象語を選んで、合計40問の文を作成した。165名のテスト結果の信頼性係数は $\alpha=.76$ となり、ある程度の信頼性を持つテストであると言えよう。さらに、本調査では、同じパターンの選択肢が続くのを避けるために、語彙テストの48問、文法テストの36問、品詞性テストの40問を合わせた124問を、ランダムに並べて、1つのテストとして実施した。

4. 結果と考察

4.1 各タイプの習得難易度

5つのタイプの品詞分類にしたがって選択した各タイプの8語は、『旧試験』における配当級、朝日新聞および毎日新聞コーパスでの頻度の3つの基準で統制されている。そこで、これら5つのタイプの間の語彙的特性に違いがないと考え、反復測定による一元配置の分散分析を用いて習得状況を検討した。その結果、品詞タイプの主効果が有意であった $[F(4, 656)=100.44, p<.001, \eta_p^2=.38]$ 。さらに単純対比 (simple contrast) ですべての組み合わせで得点の違いを分析した。その結果、「日<中」と「日=中」は有意な違いがなく、得点が最も高かった。また、「日<中」、「日U中」、「日≠中」の順で有意に難しくなっていた。平均、標準偏差、単純対比の結果は表6に示した。

品詞性テストの結果は、「日≠中」の8点満点の平均得点(M=3.99, 正答率はM=49.88%)が最も低く、次に低かったのは「日U中」(M=4.31, 53.88%)である。「日≠中」(たとえば、「混乱」)は日本語と中国語における品詞が全く異なる同形同義語であり、「日U中」(たとえば、「豊富」)は日中両言語で共有する品詞がある一方、それぞれ異なる品

詞も持つ同形同義語である。熊・玉岡（2014）は、中国語の品詞による誤用は学習者がなかなか気づきにくいいため、これら2つのタイプの習得が難しいと予測している。本研究の結果はこの予測を支持するものであった。

表6 反復測定による分散分析の結果（各タイプの満点は8点）

日＝中		日<中		日>中		日U中		日≠中	
<i>M</i>	<i>SD</i>								
6.12	1.58	6.05	1.50	4.69	1.67	4.31	1.69	3.99	1.42

単純対比の結果：「日＝中」＝「日<中」>「日>中」>「日U中」>「日≠中」

「日>中」(M=4.69, 58.63%)には日中両言語で共有する品詞もあるが、日本語の独自の品詞もある同形語である。王（2014）は、日本語の品詞使用範囲がより広い場合は、誤用が生じないとしている。しかし、本研究の結果、この「日>中」タイプ（たとえば、「電話」）の習得は、「日≠中」や「日U中」ほど難しくないが、容易に習得できるとまではいえないようである。さらに、中国人日本語学習者の作文コーパスでは、日本語が名詞と動詞で、中国語が名詞である場合は、母語の影響で中国語に存在しない動詞の使用を避ける傾向が見られるとの報告(何, 2015)もあり、それも勘案すると、誤用が生じない原因はこのタイプの品詞が習得できたからではなく、中国語の品詞をそのまま借用しても間違いにならないことにあると思われる。

最も得点が高かったのは「日＝中」(M=6.12, 76.50%)と「日<中」(M=6.05, 75.63%)であった。「日＝中」(たとえば、「練習」)の平均が他の条件と比べて比較的高い得点であったことから、先行研究の母語知識を利用して習得が進むという主張を支持していると言えよう。一方、「日<中」は中国語の品詞使用範囲がより広いため、中国語独自の品詞で生じた誤用については日本語母語話者からの指摘がない限り修正するのは難しいと、熊・玉岡（2014）では予測されている。品詞性テストの結果は予測に反して、「日<中」と「日＝中」が同じくらいの正答率になった。「日<中」の調査項目は「科学、現実、友好」などであり、日本語では名詞、中国語では名詞と形容詞の語であった。張（2008）の調査結果によれば、このタイプの語の習得は困難であると推測されるが、本研究では同様の結果は得られなかった。これについては、(1)中国語の形容詞としての用法が抑制できた、(2)中国語の「的(de)」による正の転移が生じた、という2つの可能性が考えられる。守屋（1995: 48）によると、中国語では二音節形容詞の場合、修飾される名詞も二音節であれば、形容詞と名詞の意味的な結びつきの強さによって「的(de)」を入れる場合と入れない場合があるという。「日<中」に使用された品詞性テストの項目を中国語に訳すと、「友好的な関係」以外は「的(de)」の付加が好まれる。さらに、このタイプの各語の正答率をみると「友好」が最も低く、51.52%

であった。このことから、「的(de)」による正の転移が生じた可能性が高いと言えよう。

以上のように、5つのタイプの習得難易度を計量的に検討したところ、「日＝中」の正答率が最も高く、「日≠中」と「日∪中」は正答率が低いことが示され、熊・玉岡(2014)による予測が支持された。一方、「日⊂中」の得点が高かった点で先行研究の予測と異なっていた。

次節では、学習者の語彙知識と文法知識は、各タイプの同形同義語の品詞の習得とどのような関係を持つかを検証する。

4.2 各タイプの習得における日本語の語彙知識・文法知識との因果関係

日本語の語彙を文レベルで正しく使用するには、まず品詞を正しく判別して、形態素を変化させたり、つけたりするプロセスがある。そのために、品詞を判別する能力、単語内での形態素変化、隣接する単語同士における局所的な依存関係などの日本語の知識が必要であると推測される。そこで、語彙知識の名詞、動詞、形容詞と機能語の4つの下位カテゴリーと、文法知識の形態素変化、局所依存と構造の複雑性の3つの下位カテゴリーを説明変数とし、「日＝中」「日⊂中」「日⊃中」「日∪中」「日≠中」の各タイプを目的変数として、それぞれの得点を予測するステップワイズ法⁵による重回帰分析を行った。分析結果は表7に示した通りである。

表7 品詞性の習得を語彙知識と文法知識で予測する重回帰分析の結果

変数	日＝中		日⊂中		日⊃中		日∪中		日≠中	
	β	<i>t</i> 値								
語彙知識 (満点48, $M=29.90$, $SD=7.44$)										
R^2	0.28		0.23		0.17		0.23		0.16	
名詞	—	—	0.48	6.94 ***	—	—	0.33	3.73 ***	0.21	2.23 *
動詞	0.37	4.43 ***	—	—	0.21	2.38 *	0.22	2.51 *	0.24	2.56 *
形容詞	0.22	2.58 *	—	—	0.25	2.81 **	—	—	—	—
機能語	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
文法知識 (満点36, $M=21.72$, $SD=5.45$)										
R^2	0.17		0.19		0.19		0.14		0.12	
形態素変化	0.24	2.85 ***	0.17	1.98 *	—	—	0.22	2.58 *	—	—
局所依存	0.23	2.71 **	0.33	3.94 ***	0.44	6.20 ***	0.21	2.43 *	0.35	4.74 ***
構造の複雑性	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

注：N=165. * $p<.05$. ** $p<.01$. *** $p<.001$. β は標準偏回帰係数、 R^2 は各タイプのステップワイズ法による重回帰分析の決定係数を示す。「—」はステップワイズ法により除外された変数を示す。多重共線性を許容度(tolerance)とVIF(variance inflation factor)で診断した。許容度はすべて0.10以上で、VIFは10以下であり、多重共線性が生じていないことを確認した。語彙知識(名詞、動詞、形容詞、機能語)と文法知識(形態素変化、局所依存、構造の複雑性)の下位カテゴリー間の相関係数は0.62から0.19の範囲で、多

重共線性が想定されるほどの強い相関は認められなかった。

「日＝中」については、日本語の語彙知識 ($R^2=.28$) では、動詞 ($\beta=.37$) と形容詞 ($\beta=.22$) が有意な説明変数となった。「日＝中」の調査対象語の 8 項目のうち、5 つが動詞で残りの 3 つが形容詞であった。日中両言語で品詞が同じであるため、日本語としてこれらの語彙を覚えなくても母語の知識に依存することで、正確に語を文中で使用できると考えられる。そのため、日本語の語彙知識が関与していないと予測される。しかし、この予測に反して、学習者の日本語の動詞と形容詞の知識がこのタイプの得点を予測していることが示された。これは、日本語の動詞と形容詞の中には、中国語と同様の使い方を持つ語彙が存在するという知識があつてこそ、はじめて母語知識を転用することができるからではないかと考えられる。

「日<中」は ($R^2=.23$)、「日＝中」と同じレベルの正答率を示した。日本語の語彙知識のうち、名詞 ($\beta=.48$) が、このタイプの得点を有意に予測した。語彙テストでは、漢語の他に、「あらすじ」のような和語や「ポスター」のような外来語の名詞が同数含まれている。これらの名詞の知識が向上するのにともない、「日<中」のタイプの得点も高まるという重回帰分析の結果から考えると、前節で述べた中国語の「的(de)」の使用による正の転移(「科学」と「的な」)が生じたことも考えられるものの、むしろ「日<中」のタイプの語が日本語の名詞として習得されていると考えるほうが自然であろう。

「日U中」と「日≠中」では、日本語の名詞と動詞の両方の知識の向上と共に、正答率が高くなる傾向がみられた。これらの 2 つのタイプは、日中両言語における対応関係は異なるものの、品詞性テストでは、「成功する」、「尊敬する」などの動詞の知識を問うものと、「実用的な」「豊富にする」のように「名詞+的/にする」を問うもののように、両タイプには同様の品詞類が含まれている。品詞性テストでは同様の知識が問われているため、類似した習得パターンが見られたのであろう。

ところが、「日>中」では他の 4 つのタイプと異なる傾向が現れた。このタイプの語は、日本語では名詞と動詞として使われるが、中国語では名詞としてのみ用いられる。品詞性テストでは「電話する」、「提案する」の使用を問う形であった。L1 の使用範囲が L2 より狭い場合、肯定証拠のインプットにより習得できるようになる (Inagaki, 2001) と考えれば、このタイプの語彙は学習者の動詞の知識が増加するにつれ、習得できるようになると考えられる。やはり、動詞が有意にこの種の語彙の理解を予測していた。加えて、日本語と中国語の両言語では、形容詞として使用されていないにもかかわらず、形容詞が有意な説明変数となった。動詞と形容詞の相関係数は 0.60 ($p<.001$) であり、2 つの品詞にある程度強い関係があるからではないかと思われる。

さらに、表 7 に示したように、語彙知識だけでなく、文法知識も同形同義語の品詞

の習得に貢献していた。とりわけ、局所依存は5つのタイプの習得のいずれにも有意な説明変数であった。局所依存は、隣接する語との関係を見出す能力である。つまり、「故障」が「車」を修飾する場合、まず「故障」が漢語動名詞で、「車」が名詞であることを判別した上で、「故障」に「～した」をつけ「故障した車」にする、といった操作ができる知識であり、これが5つの品詞タイプの使用に貢献していた。局所依存の他に、形態素変化の知識も要求されるが、「日＝中」「日<中」「日U中」では、形態素変化が有意な説明変数となったのに対し、残りの2つでは同様の結果は得られなかった。

最後に、機能語と構造の複雑性の知識はいずれもこれら5つのタイプの品詞習得に貢献していなかった。本研究で使用した語彙テストでは、「～を皮切りに」や「～に至るまで」など形態素変化を持たない語は機能語としたが、こうした機能語の知識は同形同義語の品詞の使用に直接に関連していないと考えられる。また、構造の複雑性が有意にならなかったのは、品詞テストの調査文がすべて連体修飾節で構成されていたからであろう。

5. おわりに

本研究は、熊・玉岡（2014）による日中同形同義語の品詞分類を用いて、165名の中国人日本語学習者を対象に日本語のテスト調査を行い、「日＝中」「日<中」「日<中」「日U中」「日≠中」の各品詞タイプの習得状況および日本語の語彙知識と文法知識がそれぞれどのように品詞の習得に影響しているかを検討した。

5つのタイプのうち、「日＝中」、「日<中」、「日U中」の同形語の文レベルでの使用は、語彙の品詞に関する知識および文法知識の形態素変化と局所依存に支えられていることが分かった。また、各タイプの品詞性の習得状況に大きな違いが見られた。「日≠中」の得点が最も低く、次に低いのは「日U中」であった。「日<中」は以上の2タイプの習得ほど難しくはないが、正答率が58.63%で、やはり容易に習得できるものではなかった。「日<中」は「日＝中」と同程度の高い正答率を示した。これらの正答率の違いはやはり中国語との品詞の対応関係に起因すると考えられる。特に、「日<中」と「日<中」の2つのタイプの構成は単一であり、前者の8語は日本語が名詞、中国語が名詞と形容詞であり、後者の8語は日本語が名詞と動詞、中国語が名詞である。張（2008）が示した日本語が名詞で中国語が動詞または形容詞の同形語の習得が困難で、日本語が動詞、中国語が名詞の同形語の習得が簡単であるという結果によれば、「日<中」の正答率は「日<中」より高いはずである。しかし本研究の結果は、「日<中」の正答率が高く、日本語では動詞、中国語では名詞として用いられる場合より、日本語では名詞、中国語では形容詞として使用される場合のほうが容易に習得される

傾向がみられた。

L2の語彙習得モデルを構築した Jiang (2000) によれば、L2の語彙習得過程は、次の3つの段階を経るといふ。第1に、L2の書字的な情報が表象されている段階 (the formal stage)、第2に、L1の意味情報および語彙的統語情報がそのままL2にコピーされている段階 (L1 lemma mediation stage)、第3に、L2の意味情報、語彙的統語情報と形態的特徴が統合される段階 (L2 integration stage) である。L2の語彙習得では、第2段階で化石化が生じ易く、第3段階にまで辿り着けないことが多いと Jiang は述べている。特に、言語間で意味類似性の高い語彙 (real friends) では、L1の知識が容易に活用できるため、L2の意味概念を新たに構築しようという意識が生じ難く、化石化が起こりやすいと考えられる。この知見を同形同義語の習得に適応してみると、日中間の漢字表記語の類似性が非常に高いので、中国人日本語学習者は、容易に語彙が学習でき、また正しく運用できるとみなしてしまいがちである。そして、両言語の品詞の違いや動詞の活用 (形態素変化) などの言語情報に気づかず、第3段階のL2の語彙的統語情報の統合まで到達できない場合が多いと考えられる。実際、本研究で取り上げた5つのタイプで考えると、最も正答率が高い場合でも76.50%でしかなかったことから、この Jiang (2000) の語彙習得過程を大枠で支持していると言えよう。

しかし、Jiang (2000) の語彙習得過程は、あくまでL1とL2の類似性から推論して、両言語における語彙が類似し過ぎている場合には、第2段階で化石化が起き易いと考え、第3段階に到達することは容易ではないとしている。ところが、本研究の重回帰分析の結果では、日本語の語彙知識と文法知識が、熊・玉岡 (2014) の分類による5つのタイプの同形同義語を文レベルで運用するのに貢献していることを示した。このことは、L1の中国語の語彙と文法の知識が影響しながらも、L2の日本語の語彙と文法の知識が蓄積されるにつれ、日本語での語彙的統語情報 (i.e. 品詞情報) についても習得が進み、同形同義語も文レベルで正確に活用できるようになることを示唆している。

このことから、日本語の品詞習得を重視すると同時に、母語知識を上手く利用しつつ誤用を避けるためには、学習法を工夫する必要があるだろう。熊・玉岡 (2014) は各タイプの学習法を提案している。まず、「日≠中」と「日<中」の学習法については、日中の品詞情報を対照しながら覚えさせ、誤用が観察される場合に否定のフィードバックを与えるべきであるとしている。また、「日U中」については『旧試験』のレベルにこだわらず、日中の品詞についての情報を含んだ一覧を作り、早い段階で学習者に品詞の対応関係を意識させることを推奨している。そして、「日>中」については大量の文例を学習者に与えることを提案しているが、本研究の結果から考えると、文の構造的な複雑性は同形同義語の習得に関与していない傾向がみられたので、むしろ文レベルのテキストを学習者に提示するよりも、「努力する人」や「実用的な技能」のよう

な短く覚え易い句を与えることで、日本語における品詞性を記憶させ、形態素変化と局所依存の能力を身につけさせたほうが効率的であろう。

最後に、本研究には、残された課題がある。「日中」の習得メカニズムでは、日中の両者に関係しない品詞も影響していた。なぜこのタイプだけが異なるのか追加調査が必要である。また、本研究は、張（2008）の品詞による習得の難易度と異なる傾向を示した。これは、調査の対象となった中国語母語話者の日本語能力の違いに起因する可能性がある。これらを明らかにするために、より詳細な品詞分類に目を向けて、上級および超上級の日本語能力を有する学習者を含めた習得過程全般にわたる調査を行う必要がある。さらに、今回の5つの品詞タイプにおいて説明変数による予測率は、最も高かったもので28%しかなかった。同形同義語の品詞の習得においては、学習者の語彙知識と文法知識の他に影響している要因を見い出す必要がある。

謝辞 本稿は、日本学術振興会特別研究員奨励費（熊可欣：15J03617）および科学研究費挑戦的萌芽研究（玉岡賀津雄：16K13242）の助成を受けたものです。また、本稿の執筆において、貴重なご助言をくださった査読者の先生方、調査にご協力いただいた多くの方々にお礼申し上げます。

注

1. 文化庁（1987）に従い、日中同形同義語を「日中両国語における意味が同じか、または、きわめて近いもの」と定義する。本研究では、日中同形同義語について、簡体字、繁体字と日本語の略字などの字体の相違を考慮しない。
2. 張（2008）は、タイプ4の結果を、正答数が77、誤答数が5と記している。しかし、正答数と誤答数の合計は72になるはずである。これは、タイプ4の数値が誤っているからであると思われる。そこで、本研究の表2では正しい数値に置き換えた。
3. 宮岡・玉岡・酒井（2011）では、『旧試験』の「文法的な「機能語」の分類リスト」（pp.151-164）から、「～ではあるまいし」「～が早いのか」「～を余儀なくされる」などの12項目を抽出して、語彙テストの「機能語」下位カテゴリーのテスト問題が作られている。
4. 朴・熊・玉岡（2014）の日韓中データベースは、検索エンジン付きでのウェブ上で公開されている（<http://kanjigodb.herokuapp.com>）。使用法の詳細は、于・玉岡（2015）を参照。
5. ステップワイズ法では、有意でない説明変数を除外し、最適な重回帰式を自動的に出力してくれるので、本研究ではステップワイズ法を使用した。

参考文献

- 天野成昭・近藤公久（2000）. 『NTT データベースシリーズ 日本語の語彙特性 第2期 CD-ROM 版』三省堂.
- 于劭贇・玉岡賀津雄（2015）. 「日韓中同形二字漢字語の品詞性ウェブ検索エンジン」『ことばの科学』29, 43-61.

- 王娟 (2012). 「日本語の接尾辞『的』について—中国語の『的』との関係—」『比較文化研究』100, 75-86.
- 王燦娟 (2013). 「品詞と意味における二重誤用されやすい日中同形語に関する研究」『東アジア日本語教育・日本文化研究』16, 29-56.
- 王燦娟 (2014). 「中国人日本語学習者に見られる日中同形語の誤用について—意味、品詞、共起の誤用をめぐって—」『東アジア日本語教育・日本文化研究』17, 221-241.
- 何龍 (2015). 「日中同形語の品詞の違いによる誤用について—中国人の日本語学習者を対象として—」『2015年国立国語研究所第8回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』1-10.
- 岸陽子 (1969). 「接尾辞“的”と中国語<中国語と日本語の比較対照>」『講座日本語教育』5, 130-142.
- 国際交流基金・日本国際教育協会 (2007). 『日本語能力試験出題基準』 凡人社.
- 石堅・王建康 (1983). 「日中同形語における文法的ズレ」『日本語と中国語の対照研究』5, 56-82.
- 張淑栄 (1987). 『中日漢語対比辞典』 ゆまに書房.
- 張麟声 (2008). 「中国語話者における日本語漢語語彙の習得について品詞性のずれに起因する習得の問題を中心に」Linguistics of kango (Japanese words of Chinese origin), Friday 14th and Saturday 15th March 2008, Université Paris Diderot-Paris 7.
- 張麟声 (2009). 「作文語彙に見られる母語の転移—中国語話者による漢語語彙の転移を中心に—」『日本語教育』140, 59-69.
- 陳毓敏 (2002a). 「日本語二字漢字語彙とそれに対応する中国語二字漢字語彙は同じか—台湾及び中国の中国語との比較—」『言語文化と日本語教育』24, 40-53.
- 陳毓敏 (2002b). 「中国語を母語とする日本語学習者における漢語習得—同形同義語の文法的ずれに焦点を当てて—」『2002年度日本語教育学会秋季大会予稿集』63-68.
- 早川杏子・玉岡賀津雄 (2015). 「改訂版・構造分類による日本語文法知識テストの開発—中国人日本語学習者のデータによるテスト評価—」『ことばの科学』29, 5-24.
- 朴善嫻・熊可欣・玉岡賀津雄 (2014). 「同形二字漢字語の品詞性に関する日韓中データベース」『ことばの科学』27, 53-111.
- 文化庁 (1978). 『中国語と対応する漢語』 大蔵省印刷局.
- 宮岡弥生・玉岡賀津雄・酒井弘 (2011). 「日本語語彙テストの開発と信頼性—中国語を母語とする日本語学習者のデータによるテスト評価—」『広島経済大学研究論集』34(1), 1-18.
- 守屋宏則 (1995). 『やさしくくわしい中国語文法の基礎』 東方書店.
- 熊可欣・玉岡賀津雄 (2014). 「日中同形二字漢字語の品詞性の対応関係に関する考察」『ことばの科学』27, 25-51.
- Inagaki, S. (2001). Motion verbs with goal PPs in the L2 acquisition of English and Japanese. *Studies in Second Language Acquisition*, 23, 153-170.
- Jiang, N. (2000). Lexical representation and development in a second language. *Applied Linguistics* 21(1), 47-77.
- Tamaoka, K., Makioka, S., Sanders, S., & Verdonschot, R. G. (2017). www.kanjidatabase.com: a new interactive online database for psychological and linguistic research on Japanese kanji and their compound words. *Psychological Research*, 81(3), 696-708.

Acquisition of Cognates' Grammatical Categories by Native Chinese Speakers Learning Japanese: Causal Relations with Japanese Lexical and Grammatical Knowledge

Ke-xin Xiong (Graduate School of Nagoya University)

Katsuo Tamaoka (Nagoya University)

Kyoko Hayakawa (Kwansei Gakuin University)

Abstract

The present study investigated the difficulties in acquiring cognates with different grammatical categories between Japanese and Chinese, and explored the effect of Japanese knowledge on the acquisition by native Chinese speakers learning Japanese. Japanese lexical and grammatical knowledge tests and a cognate test with Japanese cognates varying by same or different grammatical usages were conducted on 165 native Chinese-speaking undergraduate students majoring in Japanese. In the cognate test, 40 cognates were divided into 5 types based on their grammatical classification (Xiong and Tamaoka, 2014). The results indicated that the acquisition of cognates was generally determined by the cognate type such that Japanese (J) and Chinese (C) cognate types were ranked from the most difficult to acquire to the easiest. $J \neq C$ cognates had the lowest overall accuracy, $J \cup C$ cognates had higher accuracy than $J \neq C$ but lower than $J \supset C$ cognates, and the $J \subset C$ and $J = C$ cognates together showed higher accuracy than all the other types. Furthermore, the acquisition of $J = C$, $J \subset C$, $J \cup C$ cognates were facilitated by the participants' Japanese lexical knowledge of grammatical category as well as their grammatical knowledge of morphological inflections and local independency.

Keywords: cognates, grammatical category, lexical and grammatical knowledge, measurement by tests, leaning strategy